

Journal of the International College
for Postgraduate Buddhist Studies
Vol. XXII, 2018

国際仏教学大学院大学研究紀要
第22号（平成30年）

智顛撰 『維摩經文疏』 訳注（六）

藤
井
教
公

智顓撰『維摩經文疏』訳注（六）

藤井教公

はじめに

筆者は智顓撰『維摩經文疏』の訳注を、順次、本誌『国際仏教学大学院大学研究紀要』第十七号（平成二十五年三月刊）と第十八号（同二十六年三月刊）、第十九号（同二十七年三月刊）、第二十号（同二十八年三月刊）、第二十一号（同二十九年三月刊）に、それぞれ智顓撰『維摩經文疏』訳注（一）、同（二）、同（三）、同（四）、同（五）として発表した。

本稿は、先に刊行した訳注（一）から（五）に続くものである。体裁は前稿を踏襲して、『新纂大日本統藏経』第十八卷所収の『維摩經文疏』のテキスト原文を数行のまとまりごとに区切って示し、その部分の訓読を掲げ、次にその部分の訳注を付した。本稿は四七七頁下段二十三行目から四八〇頁上段十三行までを掲載する。この続きは順次発表していきたい。過誤の多いことを懼れるが、大方の批正を請う次第である。テキストの解題は智顓撰『維摩經文疏』訳注（一）を参照されたい。凡例は次の通りである。

凡例

- 一、テキスト原文には一、二点、レ点などの返り点が施されているが、読点や句点はない。今、返り点を省き、意味に従って句点を施した。
- 一、テキストの文中には頁と段の変わり目にカッコで『新纂大日本統藏經』卷十八の頁と段を示した。
- 一、字体はテキスト部分とその引用、書き下し文、『大正藏經』所収の經典論書の引用部分などは、原則として正字を用いた。それ以外は略字を用いた。
- 一、テキスト文中のゴチック字体部分は『維摩經』の經文部分である。
- 一、テキスト文中の(へ)内の部分は割り注部分を示す。
- 一、書き下し文中のヤマカッコは筆者による補いで、『略疏』との対照によるテキスト欄外注記に従って字を補ったものである。
- 一、守篤本純の『維摩詰經疏籤録』の場所の指示は、巻数と頁数を記し、頁数の次に表の場合は「オ」、裏の場合は「ウ」と記した。
- 一、註に記した典拠の引用文で、引用部分が判然としにくい場合には該当部分に傍線を付した。

本文

【テキスト】『新纂大日本統藏經』卷十八、477c23-478a19(以下頁、段、行のみを記す)
第二釋大義者。若依胡本應云摩訶。大智論云摩訶。或云勝。或云多。[478a]天王大人之所敬故名爲大勝。九

十六種外道故名爲勝。數至八千故名多也。今明外道有三種。一者一切智外道。二神通外道。三韋陀外道。具此三種。外國名大外道。佛對破此三外道。故於三藏教門。說三種念處。一性念處。二共念處。三緣念處。若能如是修習三種念處。非但止破三種外道。得入性地。證果之時即成三種解脫。謂慧得好解脫。心得好解脫。及得無礙解脫。名大比丘。名大羅漢也。若別對得慧解脫名大。得心解脫是名勝。得無礙解脫故名多。三種解脫具足故名波羅蜜聲聞。成就一切羅漢功德。故名爲大也。

問曰。若得慧解脫即名大者。何須得具三方名大也。

答曰。大涅槃三德具故名大涅槃。而摩訶般若亦別受大名。三藏教既有四門。即有四種大比丘。通教亦有四門。復有四種大比丘。合有八種大聲聞。皆名波羅蜜聲聞。故名爲大。

若約觀心。即就析體二種從假入空觀而明也。此二種八大比丘義。若依毗曇有門明義。只有一種大比丘義。若依成論空門明義。亦但明一種大比丘義。餘六種大比丘是所不明也。

【書き下し】

第二に大の義を釋すとは、若し胡本に依らば、應に摩訶と云うべし。『大智論』に「摩訶と云い、或いは勝と云い、或いは多と云う。」^①天王大人の敬う所なるが故に名けて大勝と爲す。九十六種外道の故に名けて勝と爲す。數八千に至るが故に多と名づくるなり」と。今、外道を明かすに三種有り。^④一には一切智外道、二に神通外道、三に韋陀外道なり。此の三種を具するを外國に大外道と名づく。佛は此の三外道を對破するが故に三藏教門に於いて三種の念處を説きたもう。一に性念處、二に共念處、三に緣念處なり。若し能く是くの如く三種念處を修習せば、但だ三種外道を止め破すのみならず、性地に入るを得。證果の時、即ち三種解脫を成ず。謂く、慧に好解脫を得、心に好解脫を得、及び無礙解脫を得ると。大比丘と名づけ、大羅漢と名づくるなり。若し別對すれば、

慧解脱を得るを大と名づけ、心解脱を得るは是れ勝と名づく。無礙解脱を得るが故に多と名づく。三種解脱具足するが故に波羅蜜聲聞と名づく。一切の羅漢の功德を成就するが故に名づけて大と爲すなり。

問うて曰く。若し慧解脱を得ば即ち大と名づくるとは、何ぞ三を具するを得るを方に大と名づくるを須いるや。答えて曰く。大涅槃は三徳具わるが故に大涅槃と名づく。而して摩訶般若も亦た別に大の名を受く。三藏教は既に四門有り^⑧。即ち四種の大比丘有り。通教に亦た四門有り^⑨。復た四種の大比丘有り。合して八種の大聲聞有り。皆、波羅蜜聲聞と名づく。故に名づけて大と爲すなり。

若し觀心に約さば、即ち析體二種の從假入空觀^⑩に就いて明かすなり。此の二種の八大比丘の義は、若し毗曇の有門に依りて義を明かさば、只だ一種の大比丘義のみ有り。若し成論の空門に依りて義を明かさば、亦た但だ一種の大比丘の義を明かすのみ。餘の六種の大比丘は、是れ明かさざる所なり。

- (1) 『大智論』に……多と云う 『大智度論』卷三に、「摩訶秦言大。或多或勝。云何大。一切衆中最上故。一切障礙斷故。天王等大人恭敬故。是名爲大。云何多。數至五千故名多。云何勝。一切九十六種道論議能破。故名勝。」(『大正藏』卷二十五、79625-29) とある。また、『法華文句』は同じように『大智度論』を引いて、「大者。釋論明大者。亦言多亦言勝。器量尊重。爲天王等大人所敬故言大。升出九十五種道外故言勝。遍知内外經書故言多。又數至一萬二千故言多。」(『大正藏』卷三十四、604-8) といつ。

- (2) 天王大人 天王は、天の神々の王、大人は轉輪聖王のこと。

- (3) 九十六種外道 釈尊在世時代の外道の總数を挙げたもの。六師外道の六師とその弟子達十五人づつを加えた数という。九十六術ともいう。『別訳雜阿含經』に「如是我聞。一時佛在王舍城耆闍崛山中。爾時王舍城有九十六種外道。各各祠祀。設有檀越。」(『大正藏』卷1、390b27-29) とある。

(4) 外道を明かすに三種有り 以下の一切智外道、神通外道、韋陀外道の三種外道について、僧肇の『注維摩』では「什曰。尼健字也。陀若提母名也。其人起見謂。罪福苦樂盡由前世。要當必償。今雖行道不能中斷。此六師盡起邪見。裸形苦行自稱一切智。大同而小異耳。凡有三種六師。合十八部。第一自稱一切智。第二得五通。第三誦四韋陀經。上說六師是第一部也。」(『大正藏』卷二十八、351a3-19)として、弟子品に出る外道の六師について羅什の解釈が挙げられている。また、『摩訶止觀』では、「關中疏云」として「一師各有三種法。一得一智法。二得神通法。三得韋陀法。一切智者。各於所計生一種見。解心明利將此見智通一切法。故名一切智外道。神通法者。發得五通變成爲鹵。轉釋爲羊。停河在耳捫摸日月。此名神通外道。韋陀法者。世間文字星醫兵貨悉能解知。是爲韋陀外道。一師則有三種得法不同也。」(『大正藏』卷四十六、132c20-27)としてゐる。「關中疏」の「關中」とは長安を指しているので、羅什及び羅什門下の疏の意であるが、ここでは『注維摩』を指すものと思われる。ただし文章は少しく異なっている。さらに『法華文句』でも前注(1)で挙げた「大」の解釈部分の続きに、「今明有大道故有大用故有大知故言大。勝者。道勝用勝知勝故言勝。多者。道多用多知多故言多。道即性念處。大於一切智外道。用即共念處。勝神通外道。知即緣念處。多四韋陀外道也。」(『大正藏』卷三十四、6b8-12)として三種外道の語を出している。

また、法雲の『翻譯名義集』には、「無因緣顛倒執性。一切智外道也。共念處者。以禪定助道。正助合修。亦名事理共觀。發得無漏三明六通。成俱解脫羅漢。對破根本愛慢。得五神通外道也。緣念處者。緣佛三藏十二部文言及一切世間名字。所緣處廣非如支佛出無佛世不稟聲教。但以神通。以悅衆生。不能說法。緣念處人。了達根性。善知四辯。堪集法藏。成無礙大羅漢。對破世間韋陀外道」(『大正藏』卷五十四、1085b15-23)とある。

(5) 三種の念處 以下に出る四念處の三種としての性念處、共念處、緣念處をいう。『大智度論』には「是四念處有三種。性念處共念處緣念處。云何爲性念處。觀身智慧是身念處。觀諸受智慧是名受念處。觀諸心智慧是名心念處。觀諸法智慧是名法念處。是爲性念處。云何名共念處。觀身爲首因緣生道。若有漏若無漏是身念處。觀受觀心觀法爲首因緣生道。若

有漏若無漏。是名受心法念處。是爲共念處。云何爲緣念處。一切色法。所謂十入及法入少分是名身念處。六種受眼觸生受。耳鼻舌身意觸生受。是名受念處。六種識眼識耳鼻舌身意識。是名心念處。想衆行衆及三無爲。是名法念處。是名緣念處。』(『大正藏』卷二十五、200c29-201a12) とある。

また『雜阿毘曇新論』では「三種説念處自性及與共亦説名爲緣者。三種念處。謂自性念處。共念處。緣念處。自性念處者。説不顛倒惠。何以故。説順身觀身觀者。是惠念者所作事。不忘授緣故。除自性過故説念處。共念處者。與正慧一果法。如世尊説。比丘善法積聚。謂四念處。是爲正緣念處者。一切法如所説。比丘一切法。説四念處。是爲正説也。攝受具故。及略緣故。共念處斷煩惱非餘。自性念處雖有略境界。彼具不足故。攝受具道斷煩惱。緣念處雖攝衆具。然境界普散故。略境界道斷煩惱。』(『大正藏』卷二十八、909a10-20) とある。

また『摩訶止観』では「若得意者。一一門中初有三種念處。一性念處。二共念處。三緣念處。性は直緣諦理。共是事理合修。緣是遍緣一切境法。亦是緣三藏教法。』(『大正藏』卷四十六、133a25) とし、性念處とは、直ちに四諦の理を觀するもの、共念處とは、四諦の理と現実の修行とを併せ修するもの、緣念處とは、一切法を遍く対象として觀するもの、とする。

- (6) 性地 三乘共十地の修道の階位で、乾慧地の次の第二段目の段階のこと。三藏教では内凡位の四善根の位に相当する。
- (7) 三種解脱 以下に出る慧解脱、心解脱、無礙解脱の三種をいう。『阿毘達磨集異門足論』に「解脱云何。答三種解脱。何等爲三。一者心解脱。二者慧解脱。三者無爲解脱。心解脱者。謂無貪善根相應心。已勝解當勝解今勝解。是名心解脱。慧解脱者。謂無癡善根相應心。已勝解當勝解今勝解。是名慧解脱。無爲解脱者。謂擇滅。是名無爲解脱。」(『大正藏』卷二十六、375c29-376a5) とある。論の言う無爲解脱は涅槃のことである。無礙解脱はこれを言い換えたものか。

- (8) 三藏教は既に四門有り 三藏教の四門とは、有門、空門、亦有亦空門、非有非空門の四門をいう。『四教義』に、「今

約四教明門各有四門別。一三藏教四門。二通教四門。三別教四門。四圓教四門。一明三藏教四門即爲四。一有門。二空門。三亦有亦空門。四非有非空門。』(『大正藏』卷四十六、729a29-b3)とある。

(9) 通教に亦た四門有り。通教の四門とは、一切実門、一切不実門、一切亦実亦不実門、一切非実非不実門の四門をいう。『四教義』に、「用。二明通教四門者。即是智度論明。一切(實。一切)不實。一切亦實亦不實。一切非實非不實。」

(『大正藏』卷四十六、729b27-28)とある。

(10) 二種の從假入空觀。藏教の析空觀と大乘の体空觀のこと。空理を觀するのに、小乘は存在の分析によつて事象や事物の空に達するが、大乘の菩薩は存在の一体的、全体的認識によつて空に達する。この二種の空觀をいう。

【テキスト】 478a19-b22

第三釋比丘者。或言有翻。或言無翻。言有翻者。翻云除饑也。明衆生薄福在因。無法自資。得報多所饑乏。出家戒行是良福田。能生物善。除因果之饑乏也。言無翻者。比丘名含三義。不可定翻也。言三義者。如智度論明。

一破惡義。二怖魔。三乞士。一破惡者。如初受得戒竟。即言我比丘某甲。以一白三羯磨。即具發無作善律儀。破一切無作惡律儀。故言破惡也。若通就行解能修戒定慧行。戒防形非定除心亂。慧悟想虛。能破見思九十八使之惡。故言破惡也。

二怖魔者。出家之人。既能破惡。故魔羅見聞即生是念。此人非但出我界域。或有傳燈之化。化我眷屬。空我宮殿。生驚怖也。理通而言之。何但鬼神魔怖。三魔亦怖也。

三明乞士者。乞是乞求之名。士是清雅之稱。夫出家之人。內修清雅之德。必須遠離四種邪命。淨命自居。福利衆生。破憍慢心。謙下自卑。乞求資身。以成清雅之德。故名乞士也。又解。只破惡正是比丘義。下兩義助成。所以者何。受戒破身口惡業。怖魔即是破愛惡。乞士即是破憍慢惡也。

若約觀行明乞士者。次第從五陰十二入十八界。求法喜禪悅之食。資無漏慧命。成盡無生智斷之雅德。故名乞士。此經下文淨名呵身子云。佛說八解脫。仁者受行豈雜欲食而聞法乎。此具^④三義。一殺賊從破惡以得名。二不生從怖魔以受稱。三應供因乞士以成應供也。若直言比丘。大小未定。或可居在外凡性地學人之位。或是小無學人。今言大比丘者。即是大阿羅漢也。當知大之一字。無所不含。即是略歎德也。

(1) 『略疏』に「戒定慧。戒防形非定除心亂」(『大正藏』卷三十八、572b28)とあり、テキスト欄外注記にも「形下疑脫非字」とあり、意味上からも今「非」の一字を補う。

(2) 原テキストでは「慮」だが、『略疏』に「慧悟想慮」(『大正藏』卷三十八、572b28)とあり、テキスト欄外注記にも「慮疑誤當作慮」とある。また、意味上からも「慮」に改める。

(3) 原テキストでは「告」だが、『略疏』には「自卑乞求資身」(『大正藏』卷三十八、572c50b)とあり、意味上からも「乞」の字が相応しいので、今、改める。

(4) 原テキストでは「具此」とあるが、テキスト欄外注記に「具此疑倒」とあり、また『略疏』にも「此具三義」(『大正藏』卷二十八、572c11-)とある。今、意味上からも「此具」と改める。

【書き下し】

第三に比丘を釋すれば、或は有翻と言ひ、或は無翻と言う。有翻と言うは、翻じて除饑^①と云うなり。衆生は福薄く、因在りて、法として自ら資くる無く、報を得ること饑乏する所多し。出家して戒行するは是れ良き福田なり。能く物の善を生じ、因果の饑乏を除くと明かすなり。

無翻と言うは、比丘の名は三義を含む。定んで翻ずるべからざるなり。三義と言うは、『智度論』に明かすが

如し。^③一には破惡の義。二には怖魔。三には乞士なり。一の破惡とは、初めて戒を受得し竟りて、即ち「我れ比丘某甲、一白三羯磨をもつて即ち無作の善律儀を具發す」と言い、一切の無作の惡律儀を破すが如し。故に破惡と言ふなり。若し通じて行解に就かは、能く戒定慧の行を修す。戒は形の非を防ぎ、定は心亂を除き、慧は想慮を悟り、能く見思・九十八使の惡を破す。故に言破惡と言ふなり。

二に怖魔とは、出家の人、既に能く惡を破す。故に魔羅見聞して即ち是の念を生ず。「此の人、但だ我が界域を出ずるのみに非ず。或は傳燈の化有りて、我が眷屬を化し、我が宮殿を空にせん」と。驚怖を生ずるなり。理通じてこれを言わば、何ぞ但だ鬼神魔のみ怖る。三魔亦た怖るるなり。

三に乞士を明かすとは、乞は是れ乞求の名なり。士は是れ清雅の稱なり。夫れ出家の人は内に清雅の徳を修し、必ず須く四種の邪命を遠離し、淨命もて自居し、衆生を福利し、憍慢心を破し。謙下して自卑し、乞求して身を資け、以て清雅の徳を成ずべし。故に乞士と名づくるなり。又解す。只だ破惡は正しく是れ比丘の義なり。下の兩義、助成す。所以は何ん。受戒は身口の惡業を破す。怖魔は即ち是れ愛の惡を破す。乞士は即ち是れ憍慢の惡を破すなり。

若し觀行に約して乞士を明かさば、次第して五陰・十二入・十八界より法喜・禪悅の食を求め、無漏の慧命に資し、無生・智斷^⑭の雅徳を成盡す。故に乞士と名づく。此の經の下の文に、淨名、身子を呵して云く。「佛は八解脱^⑮を説きたまい、仁者は受行せり。豈に欲食を雜えて而も法を聞かんや」と。此の三義を具す。一には殺賊、破惡より以て名を得。二には不生、怖魔より以て稱を受く。三には應供、乞士に因り以て應供を成ずるなり。若し直ちに比丘と言わば、大小未だ定らず。或は外凡性地の學人の位に居在すべし。或は是れ小の無學人なるか。今、大比丘と言わば、即ち是れ大阿羅漢なり。まさに知るべし。大の一字は含まざる所無し。即ち是れ略して歎徳するなり。

- (1) 除鐘 比丘の訳語。福德の因を修し、福田から善という果報を生ずるので鐘之が除かれるという意味。比丘は除鐘男、比丘尼は除鐘女と記される。白法祖訳『仏般泥洹經』に「阿難。比丘亦有四徳。其有除鐘男除鐘女。清信士清信女之阿難所。從問經戒。阿難爲具廣陳演之。」(『大正藏』卷一、169c4-6)とある。
- (2) 法として自ら資くる無く 仏の教えを受けて自身の福德に資するようなことがない、という意味。
- (3) 『智度論』に明かすが如し 『大智度論』卷三に、「何名比丘。比丘名乞士。清淨活命故名爲乞士。(中略)舍利弗因爲說法得須陀洹道。如是清淨乞食活命故名乞士。復次比名破。丘名煩惱。能破煩惱故名比丘。(中略)復次比名怖。丘名能。能怖魔王及魔人民。當出家剃頭著染衣受戒。是時魔怖。何以故怖。魔王言是人必得人涅槃。如佛說。有人能剃頭著染衣一心受戒。是人漸漸斷結 離苦入涅槃」(『大正藏』卷二十五、79c1-80a10)とある。
- (4) 一白三羯磨 ここでは仏教教団における授戒の形式のこと。「白」は表白の意味で、羯磨師(司会者)が授戒式の開式を宣言するのを「一白」、受戒者が戒師から受ける戒を三度繰り返して唱えることを三羯磨という。授戒式に限らず、教団内における協議事項は議題の提出(「白」)を受けて全員が賛否を表明して決定されるが、その際、重要でない日常的な事項は一回の「白」と一度の採決によって決められる(「白二羯磨」。しかし重要な議題の場合は、一度の「白」に對して、三度の採決が行われる(都合四回の教団としての行為なので白四羯磨と呼ばれる)。羯磨は教団内の集団的行為の意味。
- (5) 善律儀 律儀とは防止、抑制の意味で、samyamaの訳語。戒律のことを意味する。価値的に善なので善律儀という。
- (6) 惡律儀 善律儀の對。生業として習慣的に行う狩猟や漁などをいう。
- (7) 形の非 「形」は身体のこと。身体的行為としてなされる非道のこと。
- (8) 想虛 凡夫の思慮分別が虚妄であること。

(9) 見思・九十八使の惡 見思は、煩惱を根本煩惱と枝末煩惱との二種に分けるうち、根本煩惱について、これを迷いの対象について分類し、言語や概念に基づく煩惱と、本能や感情に基づく煩惱とに分け、前者を見惑、後者を思惑という。九十八使とは九十八睡眠ともいい、根本煩惱を三界に分属し、欲界に三十六、色界に三十一、無色界に三十一を数える。これ等を併せて九十八睡眠という。この九十八睡眠は、迷いの対象という観点からは見惑の八十八使と思惑(修惑)の十惑とに分けられる。「使」は煩惱の意。

(10) 魔羅 maraの音写。惡魔のこと。ここでは第六天の魔王波旬(Papayan)を指すか。

(11) 三魔 ここでは四魔(煩惱魔、陰魔、死魔、他化自在天魔)のうち、鬼神魔(他化自在天魔)を除いた三魔を意味するか。

(12) 四種の邪命 四邪命食のこと。四不淨食ともいう。修行者の避けるべき四種類の食物。(1) 下口食(耕作によって得た五穀などの食物)(2) 仰口食(觀天望氣などの手段によって得た食物)(3) 方口食(他人のために使いとなり、報酬として得た食物)(4) 四維口食(醫方治病、占星術などの占いや呪術によって得た食物)の四種をいう。

求那跋陀羅訳『雜阿含經』には、「沙門婆羅門明於事者。明於橫法。邪命求食者。如是沙門婆羅門下口食也。若諸沙門婆羅門仰觀星曆邪命求食者。如是沙門婆羅門則爲仰口食也。若諸沙門婆羅門爲他使命邪命求食者。如是沙門婆羅門則爲方口食也。若有沙門婆羅門。爲諸醫方種 種治病邪命求食者。如是沙門婆羅門則爲四維口食也。姊妹。我不墮此四種邪命而求食也。」(『大正藏』卷一、131c23-132a2)とあり、また『大智度論』には、「舍利弗言。有出家人合藥種穀殖樹等不淨活命者。是名下口食。有出家人觀視星宿日月風雨雷電霹靂不淨活命者。是名仰口食。有出家人曲媚豪勢通使四方巧言多求不淨活命者。是名方口食。有出家人學種種呪術卜筮吉凶如是等種種不淨活命者。是名四維口食。」(『大正藏』卷二十五、79c8-14)とある。

(13) 法喜・禪悅の食 法の喜び、禪定の悦びを食とすること。『妙法華』五百弟子受記品第八に「其國衆生常以二食。一

者法喜食。二者禪悅食。」(『大正藏』卷九、27c28-29) とある。

- (14) 無生・智斷 無生は生じることがないことをいう。一切は空で寂滅であるので生起することがないこと。智斷は、智慧とその智慧による煩惱の断尽のこと。

- (15) 此の經の下の文に 香積仏品に「時維摩詰。知其意而語言。佛説八解脱。仁者受行。豈雜欲食而聞法乎。」(『大正藏』卷十四、552a7-8) とある。

- (16) 八解脱 八背捨のこと。阿羅漢に至るための禪定の修行によつて得られる八種の解脱をいう。

- (17) 外凡性地 外凡は修行の階位で、三藏教の三賢位(五停心、別相念住、総相念住)の位、性地は三乘共の十地では第一地に、三藏教では内凡の四善根の位に相当する。【テキスト】477c23-478a19の注(9)も参照。

【テキスト】 478b22-c12

第四釋衆義。若依胡本應言僧伽。此翻爲衆。直一比丘不名爲衆。多比丘共集一處名爲衆也。律明四人以上皆名爲衆。[478c] 如一樹非林。衆樹共聚乃名林也。智度論云。僧伽有四種。一愚癡僧。二啞羊僧。三有羞僧。四眞實僧。一愚癡僧者。謂破戒放逸僧也。二啞羊僧者。雖持禁戒。而不能分別戒定智慧開遮通塞之相。有難妨請決所疑。默然無對猶如啞羊也。三慚愧有羞僧者。若出家人能持淨戒修定習慧。亦能分別三藏。爲人判決所疑。但未發眞無漏。猶居外凡内凡之位。自愧未能成就聖法。謬墮僧衆受四事敬待。常脩愧自責也。亦名事和僧。四眞實僧者。從苦忍見眞無漏四果聖人。皆名眞實理和僧也。此四種僧前二種雖有僧名。既非事和不堪行僧事。後二種堪行僧事也。

第五明數者數有八千事明數義可解對行明數意則難知也。

【書き下し】

第四に衆の義を釋す。若し胡本に依らば應に僧伽⁽¹⁾と言ふべし。此に翻じて衆と爲す。直に一比丘を名づけて衆と爲さず。多くの比丘の共に一處に集まるを名づけて衆と爲すなり。律に四人以上を皆名づけて衆と爲すと明かす⁽²⁾。一樹は林に非ず、衆樹共に聚るを乃ち林と名づくるが如きなり。『智度論』に云く、⁽³⁾「僧伽に四種有り。一に愚癡僧、二に啞羊僧、三に有羞僧、四に眞實僧なり」と。一の愚癡僧とは、破戒放逸僧を謂うなり。二の啞羊僧とは、禁戒を持すと雖も、しかも戒定・智慧・開遮・通塞の相を分別すること能わず。難妨有りて、疑とする所を決することを請うも、默然として對すること無きこと、猶し、啞羊の如きなり。三に慚愧有羞僧とは、若し出家人、能く淨戒を持して定を修し慧を習う。亦た能く三藏を分別し、人の爲に疑とする所を判決す。但し、未だ眞の無漏を發せず。猶し外凡・内凡の位に居て、自ら未だ聖法を成就すること能わず、謬つて僧衆に墮し⁽⁴⁾四事の敬待を受くることを愧じ、常に愧を脩して自責するなり。亦た、事の和僧と名づく。四に眞實僧とは、苦忍⁽⁵⁾より眞の無漏を見る四果の聖人にして、皆、眞實の理の和僧と名づくるなり。此の四種僧の前の二種は僧の名有りと雖も、既に事の和に非ず、僧事を行ずるに堪えず。後の二種は僧事を行ずるに堪うるなり。

第五に數を明かさば、數に八千有り、事に數を明かす義は解すべし。行に對して數を明かす意は則ち知り難きなり。

(1) 僧伽 sangha の音写。略して「僧」と記されることがある。

(2) 律に四人……明かす。たとえば『四分律』卷三十五には「時諸比丘。有須四人衆羯磨事起。五比丘衆。十比丘衆。

二十比丘衆羯磨事起。」(『大正藏』卷二十二、819c1-3)とあつて、羯磨事(教団内の採決事項)を起こす最低の必要人数が四人であることが記される。

- (3) 『智度論』に云く、『大智度論』卷三に、「諸比丘和合故僧名生。是僧四種。有羞僧。無羞僧。啞羊僧。實僧。云何名有羞僧。持戒不破。身口清淨。能別好醜。未得道。是名有羞僧。云何名無羞僧。破戒。身口不淨。無惡不作。是名無羞僧。云何名啞羊僧。雖不破戒。鈍根無慧。不別好醜。不知輕重。不知有罪無罪。若有僧事。二人共諍。不能斷決。默然無言。譬如白羊乃至人殺不能作聲。是名啞羊僧。云何名實僧。若學人若無學人。住四果中。行四向道。是名實僧。是中二種僧可共。百一羯磨說戒受歲種種得作。是中實聲聞僧六千五百。菩薩僧二種。有羞僧實僧。以是實僧故餘皆得名僧。以是故名比丘僧。」(『大正藏』卷二十五, 801a13)とある。テキストの以下の四種の僧の記述もこれに基づいている。
- (4) 開遮 許されることと、禁止されること。たとえば『根本説一切有部毘奈耶』卷三十には「云何分別八他勝法。謂於初八善識開遮云何。善解八尊重法謂於八事善能開演。若苾芻具七法。衆應差作教授必芻尼人。如世尊説。」(『大正藏』卷二十三, 794c13-18)とある。
- (5) 外凡・内凡の位 修道の階位で、三藏教では凡夫位に外凡と内凡を分ける。外凡は三賢、内凡は四善根を修する。三乗共の十地では外凡は乾慧地に、内凡は性地に相当する。
- (6) 四事 僧伽の修行僧に必要な四種の生活必需品のこと。飲食、衣服、臥具、医薬品の四種をいう。『雜一阿含經』には「爾時尊者尸婆羅還在舍衛國本邦之處。衆人敬仰得四事供養。衣被飲食床褥臥具病瘦醫藥。」(『大正藏』卷二、684a25-28)とある。
- (7) 苦忍 苦法智忍の略。苦法忍とも。修道の階位において凡夫位から見道位に進入し、そこで見惑という四諦の理に迷う八十八使の煩惱を八忍八智の十六心によって断ずるが、その十六心の最初の心を苦法智忍という。苦法とは四諦のうち苦諦の法のこと。「忍」とは忍可決定の意で、信認し、決定すること。その結果によって「智」が生じるので智忍という。苦諦の法を対象として信認し、その結果生じる智慧を苦法智という。苦法智忍とはその智を得る過程をいう。
- (8) 四果の聖人 三藏教の修行道において、凡夫位から聖者の位である見道位に入り、さらに修道、無學道へと進むが、

その間に四向四果の八輩という過程がある。このうちの四種の果である、預流果、一來果、不還果、阿羅漢果を四果と
いう。

【テキスト】 478c14-479a19

菩薩者。

此下第二辨菩薩衆證成同聞。何但聲聞大比丘衆同聞此經。亦有大菩薩衆三萬二千。親承演說非謬傳也。就此文
有五別。第一明人類。第二辨數。第三歎德。第四結成歎德。第五累名。

第一明人類者。夫學佛法。大乘行人通名菩薩。菩薩者大乘行人氣類也。若具存西土。應云菩提薩埵。什師恐繁
略提埵兩字。但云菩薩。翻譯不同。阿毗曇云。自覺覺他名爲菩薩。有言。菩提云無上道。薩埵名大心。是謂無上
道大心。此人大心爲衆生。求無上道故名菩薩。安法師云。開士始士^①。又翻云大道心衆生。古本翻云高士。如是等
異翻不定。須留胡音。今依大智論。釋菩提名佛道。薩埵名成衆生。此人用諸佛道。成就衆生。故名菩提薩埵。復
次菩提是自行。薩埵是化衆生。是人自脩佛道。又用此道化他。故名菩薩。若不如此。已所脩持爲無惠利。但三乘
同名菩提。而二乘不名薩埵者。以無大悲化物故。不得別受斯稱也。是則雖略提埵二字。異乎二乘。其義宛然也。
若約三藏通教見真。通名爲道。不得即名薩埵。別圓兩教見真。如慈石吸鐵。非但止名菩提。亦得即名薩埵。故大
涅槃經云。一實諦者即是大乘。若非大乘。非一實諦。

問曰。前兩教菩薩見真。若不得名薩埵。何異二乘。

答曰。別起慈悲願行方名薩埵。異二乘也。今用四教。明菩薩義不同。已具玄義分別。此經所明。多用通別圓三
教意。釋爲歎德也。所以不用三藏教解歎德者。非摩訶衍正意也。而有時引出正。爲比決大小兩教明義不同耳。觀
心明菩薩義者。約三觀分別。析體兩觀。從假入空。起大悲心。即名菩薩。修後兩觀任運即是菩薩義也。

(1) テキスト原文は「土」。しかし、意味上から今、改める。『略疏』には「安師云開士始士。」(『大正藏』卷三十八、5738-9)とあり、また時代は下るが南宋の法雲『翻訳名義集』にも「安師云開士始士。」(『大正藏』卷五十四、1060b24)とある。

【書き下し】

菩薩者。

此の下、第二に菩薩衆を辨じ、同聞を證成す。何ぞ但だ聲聞大比丘衆のみ同じく此の經を聞くや。亦た大菩薩衆三萬二千有り。親しく演説を承けて謬傳に非ざるなり。此の文に就いて五別有り。第一に人類を明かす。第二に數を辨ず。第三に徳を歎ず。第四に徳を歎ざるを結成す。第五に名を累ぬ。

第一に人類を明かすとは。夫れ佛法を學する大乘の行人を通じて菩薩と名づく。菩薩とは大乘の行人の氣類なり。若し具さに西土に存すれば、應に菩提薩埵と云うべし。什師繁を恐れて提埵の兩字を略して但だ菩薩と云う。翻譯不同なり。阿毗曇に云く、^①「自覺覺他を名づけて菩薩と爲す」と。有るの言わく、^②「菩提を無上道と云う。薩埵を大心と名づく。是れ無上道大心と謂う」と。此の人、大心を衆生と爲す。無上道を求むるが故に菩薩と名づく。安法師の云く、^③「開士始士」と。又翻じて大道心衆生と云う。古本に翻じて高士と云う。^④是くの如き等の異翻不定なり。須らく胡音を留むべし。今『大智論』に依るに、^⑤「菩提を釋して佛道と名づく。薩埵を名づけて衆生と成す」と。此の人は諸の佛道を用いて、衆生を成就す。故に菩提薩埵と名づく。復た次に菩提は是れ自行なり。薩埵は是れ衆生を化す。是の人自ら佛道を脩し、又此の道を用いて他を化す。故に菩薩と名づく。若し此の如くならずば、已に脩持する所は惠利無しと爲す。但だ三乘同じく菩提と名づく。而して二乘を薩埵と名づけざ

るは、大悲もて物を化すこと無きを以ての故なり。別に斯の稱を受くることを得ざるなり。是れ則ち提埵の二字を略すると雖も、二乗に異なる。其の義宛然たるなり。若し三藏通教に真を見るに約さば、通じて名づけて道と爲すも、即ち薩埵と名づくることを得ず。別圓兩教が真を見るは、慈石の鐵を吸うが如し。但止だ菩提と名づくるに非ず、亦た即ち薩埵と名づくることを得。故に『大涅槃經』に云く、「一實諦は即ち是れ大乘なり。若し大乘に非ざれば、一實諦に非ず」と。

問うて曰く。前の兩教の菩薩は真を見るに、若し薩埵と名づくるを得ざれば、何ぞ二乗に異ならん。

答えて曰く。別に慈悲願行を起こすを方に薩埵と名づく。二乗に異なるなり。今四教を用いて菩薩の義の不同なることを明かす。已に具さに『玄義』に分別す。此の經の明かす所は、多く通別圓の三教の意を用う。歎徳を爲すを釋するなり。三藏教を用いて歎徳を解さざる所以は、摩訶衍の正意に非ざればなり。而して時有りて、引出するは正しく大小兩教の義を明かすこと不同なるを比決せんが爲なるのみ。

觀心もて菩薩の義を明かすとは、三觀に約して分別す。析體の兩觀、從假入空して大悲心を起こすを即ち菩薩と名づく。後の兩觀を修すること任運なるは即ち是れ菩薩の義なり。

- (1) 大乘の行人の氣類なり 大乘の修行者という氣質を同じくする者の意。「氣類」については『法華玄義』に「次別解者。取氣類相似合爲四番」(『大正藏』卷三十三、694a19)、『法華文句』に「二類者。皆是大比丘氣類也」(『大正藏』卷三十四、6a19)など、多くに用例がある。

- (2) 阿毗曇に云く『舍利弗阿毘曇論』に「云何菩薩人。若人三十二相成就。不從他聞。不受他教。不請他說。不聽他法。自思自覺自觀。於一切法知見無礙。當得自力自在豪尊勝貴自在。當得知見無上正覺。當成就如來十力四無所畏。成就大慈轉於法輪。是名菩薩人。」(『大正藏』卷二十八、365a26b1)とある。また、『大智度論』卷四に「復次阿毘曇中。迦

旃延尼子弟子輩言。何名菩薩。自覺復能覺他。是名菩薩。必當作佛。是名菩薩。」(『大正藏』卷二十五、86c1-6)ただし、「自覺覺他」の言葉自体は『仏本行集経』で「又復不能自覺覺他作沙門行。」(『大正藏』卷三二、757b1-5)とあるなど、阿含經典以來、多くの經典論書に見られる。

(3) 有るの言わく 未検。『籤録』も「未詳」とする。ただし、『大智度論』卷四に「問曰。何等名菩提。何等名薩埵。答曰。菩提名諸佛道。薩埵名或衆生或大心。」(『大正藏』卷二十五、86a13-14)とある。

(4) 安法師の云く 『籤録』は安法師とは弥天の道安を指すという。『出三藏記集』卷一の前後出經異記第五に「舊經衆祐新經世尊 舊經扶薩〔亦云開士〕 新經菩薩」(「」は割り注部分を示す)、『大正藏』卷五十五、5d14-15)とあることを指示する(卷一、二十八才)。

(5) 古本に翻じて高士と云う 『籤録』は『垂裕記』を引いて、古本とは本経のことを指すとしている。しかし、支謙訳にはこの語は見つからず、昔の本にはあったに違いないとする(卷一、二十八才)。「高士」の語自体は白法祖訳『佛般泥洹経』や法立訳・法炬訳の『大樓炭経』などの阿含經典以來用いられている。

(6) 『大智論』に依るに 前注(3)を参照。

(7) 『大涅槃経』に云く 南本『大般涅槃経』卷十二、聖行品に「實諦者名曰大乘。非大乘者不名實諦。」(『大正藏』卷十一、685a28)とある。

(8) 析體の兩觀 藏教の析空觀と大乘の体空觀のこと。【テキスト】477c23-478a19部分の注(10)を参照。

【テキスト】479a20-b16
三萬二千。

第二辨數者。數量多少依事。可知。或表法門。其意難見。未可定對也。^①

衆所知識。

第三歎德。此下爲二意。一總歎〔479b〕。二別歎。第一總歎者。即是初標歎德章門。若無自行化化之德。豈爲衆所知識也。此諸大士隨處利物。荷澤無邊。十方衆生莫不知識也。聞名歸德。名之爲知。觀形敬揖。謂之爲識。但衆生有四教根性不同。菩薩即有四種行化之別。約四教明。即有四種衆所知識之殊也。若三藏教明。三僧祇行滿。百劫種三十二相業。即有大人相現。物所歸仰名衆所知識也。若通教明。八地以上。道觀雙流。神通利物。名衆所知識。若別教登地以上。即現十法界身。隨緣利物。名衆所知識。圓教初住以上。得如來一身無量身。亦能現十法界像。隨緣利物。亦名衆所知識。但未能橫遍十方。豎高三土。爲一切有緣之衆之所知識。今此諸大菩薩。皆是補處。橫遍十方。豎高同居方便果報三土。有緣莫不知識。故云衆所知識也。若約觀心。三觀心明。即德建名立。是則聞名歸德。觀形無不敬揖。亦爲衆所知識。

(1) 原テキストには「對定」とあるも、欄外注記に「對定疑寫倒」とあり、また『略疏』には「表法難見未可定對」(『大正藏』卷二十八 573a26)と云う。意味上からも今、改める。

【書き下し】

三萬二千。

第二に數を辨ずるとは、數量の多少は事に依る。知るべし。或は法門を表す。其の意、見難し。未だ定んで對すべからざるなり。衆の知識する所なり。

第三に德を歎ず。此の下二意と爲す。一に總歎。二に別歎なり。第一の總歎とは、即ち是れ初めに歎德の章門

を標す。若し自行化佗の徳無くんば、豈に衆の知識する所と爲さんや。此の諸の居士は隨處に物を利して、荷澤①無邊なり。十方の衆生、知識せざるなきなり。名を聞いて徳に歸す。これを名づけて知と爲す。形を觀て敬揖②。これを謂いて識と爲す。但だ衆生に四教の根性不同有り。菩薩は即ち四種の行化の別有り。四教に約して明かさば、即ち四種の衆所知識の殊り有るなり。若し三藏教に明かさば、三僧祇③の行滿じ、百劫に三十二相の業を種え、即ち大人の相現④すること有り。物の歸仰する所を衆所知識と名づくるなり。

若し通教に明かさば、八地以上は道觀雙流④し、神通もて物を利するを衆所知識と名づく。

若し別教の登地以上ならば、即ち十法界に身を現す。緣に隨つて物を利するを衆所知識と名づく。

圓教の初住以上は、如來の一身、無量身を得。亦た能く十法界に像を現じ、緣に隨つて物を利するを亦た衆所知識と名づく。但し未だ横に十方に遍ねからず、豎に三土⑤に高からずして、一切有緣の衆の知識する所と爲ること能わず。

今、此の諸の大菩薩。皆是れ補處にして、横に十方に遍く、豎に同居・方便・果報の三土⑥に高し。有緣の知識せざるなし。故に衆所知識と云うなり。

若し觀心に約さば、三觀もて心に明かせば、即ち徳建ち、名立つ。是れ則ち名を聞いて徳に歸し、形を觀て敬揖せざるなく、亦た衆の知識する所と爲る。

(1) 荷澤 (人々が) 恩恵を蒙ること。「沢」は恵み、潤いの意。「荷」は恩恵を受ける、蒙るの意。灌頂の『国清百録』に「凡五十五所。遂使水陸沾濡人蟲荷澤。」(『大正藏』卷四十六、822b15) とある。

(2) 形を觀て敬揖す。「形」は身体、形状のこと。その身体の様相を見て敬いの礼を取ることを。

(3) 三僧祇の行滿じ、……現すること有り。三藏教では、菩薩は三阿僧祇劫の長期に亘つて六度の修行をなし、その修行

の完成後にさらに百劫の間、大人の相である三十二相を得るための福業を積む。

(4) 道觀雙流 「道」は化道、「觀」は觀法のこと、八地以上の菩薩が衆生教化の利他行と自身の修行である空理の觀察とを同時に行うこと。『法華玄義』に「世人採經論意云。六地斷惑與羅漢齊。七地修方便道。八地道觀雙流。破無明成佛。即此意也。」(『大正藏』卷二十三、714a13)とある。

(5) 三土 天台でいう四種の仏国土のうち、常寂光土を除いた三種の仏国土。後に出る。

(6) 同居・方便・果報の三土 天台では仏国土に四種を説く。下位から順に凡聖同居土、方便有余土、果報無障礙土、常寂光土という。このうちの常寂光土を除いた三土。

【テキスト】 479b17-c18

[479b17] 大智本行皆悉成就。

[479b18] 二別歎德。此下即有三別。一略歎自行化他德。二廣歎自行化他德。三隣果歎德。一略歎者即爲二。

一略歎自行德。二略歎化他德。一略歎自行。又爲二。一正歎自行。二釋歎。正歎者即是大智本行也。解此或約一法門明歎德。或約二法門明歎德。約一法門歎者。大智即是本行也。依本起智。智即是行。故言大智本行。是以法華云。諸法從本來。常自寂滅相。佛子行道已。^①來世得作佛。此經亦云。從無住本立一切法。若南土常徒舊解。帖此經文。多從八地已上。約位分文帖釋。若北方大乘師。即從初地以上。分文約位帖釋。若什師明歎德。從下至上。漸稱歎也。解既不同。未敢偏用。所以者何。如南方。引八地威神建立文證。故知初歎八地之德也。北方引七波羅蜜證。歎初地乃至七地之德。一往引證經文各便。若欲和通則頌相乖違。但經文欲對諸地。亦處處有之。未足定執謂爲得稱集經者意也。今輒用一家義意。釋歎德者。意謂一往多是歎上地之德。若歎上地勝德。自攝下地之劣德也。所以者何。菩薩諸地功德通論一往行類是同。但上地得其勝品。下地得其劣品。今約勝品。稱歎。自攝劣品。而不

可分別。此一種功德歎下。此一種功德歎上也。如歎大智本行皆悉成就。上位金剛智滿。始是皆悉成就。豈可約歎下地。如歎能師子吼其所說法乃如雷震。下地亦能有此說法。何得的歎上地。故知分別以釋歎德互有所失也。

(1) テキスト原文は「已」に作る。意味上から今、「已」に改める。

(2) テキスト原文は「已」に作る。意味上から今、「已」に改める。

(3) テキスト原文は「觀」に作る。しかし、『略疏』には「什師從下至上漸勝稱歎。」(『大正藏』卷三十八、573b21)とあり、意味上からも今改める。

(4) テキスト欄外注記に「歎上疑脫如字」とあり、『略疏』には「如歎能師子吼乃如雷震」(『大正藏』卷十八、573c)とあるので、今、テキストに「如」の字を加える。

【書き下し】

大智の本行皆悉く成就す。

二に別して徳を歎ず。此の下、即ち三の別有り。一に自行化他の徳を略して歎ず。二には自行化他の徳を廣く歎ず。三には隣果に徳を歎ず。一に略して歎ずとは、即ち二と爲す。一に略して自行の徳を歎ず。二に略して化他の徳を歎ず。一に略して自行の徳を歎ずるを又二と爲す。一には正しく自行を歎ず。二には歎を釋す。正しく歎ずるは即ち是れ大智の本行なり。此れを解するに或は一法門に約して歎徳を明かす。或は二法門に約して歎徳を明かす。一法門に約して歎ずとは、大智即ち是れ本行なり。本に依りて智を起こす。智即ち是れ行なり。故に大智の本行と言う。是こを以て『法華』に云く、「諸法本とより來、常に自ら寂滅の相なり。佛子、道を行じ已つて、來世に作佛することを得」と。此の經に亦た云く、「無住の本より一切法を立つ」と。南土の常の徒の舊

解の若きは、此の經文を帖するに、多く八地已上より、位に約して文を分かつて帖釋す。北方の大乗師の若きは、即ち初地以上より、文を分かつて位に約して帖釋す。什師の若きは歎德を明かすこと、下より上に至り、漸に稱歎するなり。解既に不同なり。未だ敢て偏えに用いず。所以は何ん。南方の如きは、八地の威神建立の文を引いて證す。故に知んぬ。初めに八地の德を歎するなりと。北方は七波羅蜜を引いて初地乃至七地の德を歎するを證す。一往の引證の經文、各便なり。若し和通せんと欲せば、則ち碩おほいに相い乖違す。但だ經文を諸地に對せんと欲せば、亦た處處にこれ有り。未だ定んで執し、集經者の意に稱うを得ると爲すと謂うには足らざるなり。今、輒ち一家の義意を用う。歎德を釋すとは、意に謂わく、一往は多くこれ上地の德を歎す。若し上地の勝德を歎すれば、自ら下地の劣德を攝するなり。所以は何ん。菩薩の諸地の功徳は、通じて論ずれば一往は行類これ同じ。但だ上地は其の勝品を得。下地は其の劣品を得。今は勝品に約して稱歎す。自ら劣品を攝す。而して此の一種の功徳は下を歎じ、此の一種の功徳は上を歎ずると分別すべからざるなり。大智の本行皆悉く成就すと歎ずるが如し。上位の金剛智滿じて、始めて是れ皆悉く成就す。豈に下地を歎ずるに約すべきや。能く師子吼すること、其の所説の法乃ち雷震の如しと歎ずるが如し。下地にも亦た能く此の説法有り。何ぞあき的らかに上地を歎ずるを得ん。故に分別して以て歎德を釋するに、互いに失う所有りと知るなり。

(1) 隣果 菩薩の修道の階位で、極果の隣り、等覺位のこと。

(2) 『法華』に云く 方便品に「諸法本來 常自寂滅相 佛子行道已 來世得作佛」(『大正藏』卷九、8025-26)とある。

(3) 此の經に亦た云く『維摩經』觀衆生品に「又問。無住孰爲本。答曰。無住則無本。文殊師利。從無住本立一切法。」(『大正藏』卷十四、547(20-22)とある。

(4) 南土の常徒の舊解 未檢。後の文に「如南方。引八地威神建立文證。」(南方の如きは、八地の威神建立の文を引いて

證す。)とある。

(5) 帖釋「帖」は貼り付ける、の意。ある部分や段を付箋を付けるように目立たせて取り上げ解釈すること。『法華文句』では「約心爲四帖釋轉明。若釋他經但用三意。」(『大正藏』卷三十四、3c24-25) などと使用されている。

(6) 北方の大乗師 未檢。淨影寺慧遠の『維摩義記』の解釈を指すか。

(7) 七波羅蜜 十波羅蜜の第七番目の方便波羅蜜のこと。十波羅蜜は、方便、願、智、力を六波羅蜜に加えて十とする。

【テキスト】 479c18-480a13

問曰。正如近無等等。此豈非歎上也也。

答曰。今一家明上來所歎諸德皆是歎上地德。故須約隣果爲歎也。是以下結歎云。如是一切功德皆悉具足。若作通下地歎德者。近無等等之言。約相對義明。互得有遠。互得有近也。如法華明行處近處。下位亦名爲近。華嚴明十地功德智慧。比爪上之土。方佛智慧如大地土。此則大懸殊也。今約三教辨菩薩類是同而。教有所主各有深淺優劣也。若通教八地以上。皆有此位。¹⁾但約二諦。以歎功德。而品有優劣。若約補處稱歎。自得攝下。若別教登地以上。即見三諦。入三世佛智地。行類是同。但約品深淺。不無十地優劣。若歎金剛補處。即攝下地諸功德也。若圓教所明。初發心住即三諦圓顯。具於一切諸佛功德。但四十位深淺品數不同。不無優劣。若約金剛等覺。往歎。即四十位功德皆攝也。但諸菩薩。外隨所感見聞不同。內則本迹高下難測。豈可定執。今但約教分別。解釋菩薩功德法門。或時內合觀心。欲令行者知諸勝妙功德皆從心出。是則諸佛解脫。皆於衆生心行求也。

(1) テキスト欄外注記に「位疑誤當作德」とある。

【書き下し】

問うて曰く。正しく無等等^①に近きが如きは、此れ豈に上地を歎ずるに非ずや。

答えて曰く。今、一家に上來歎ずる所の諸徳を明かすに、皆な是れ上地の徳を歎ず。故に須く隣果^②に約して歎を爲すなり。是こを以て下に歎を結して云く、「是くの如き一切の功徳、皆な悉く具足す」と。若し下地に通じて歎徳を作さば、無等等に近しの言は相對の義に約して明かす。互いに遠有ることを得、互いに近有ることを得るなり。『法華』に行處と近處とを明かすが如し。

下位を亦た名づけて近と爲す。『華嚴』に明かす十地の功徳の智慧を爪上の土に比し、佛の智慧を大地の土に方^{くら}ぶるが如し。此れ則ち大いに懸かに殊なるなり。今、三教に約して菩薩の類は是れ同じにして、教に主とする所有り、各、深淺優劣有るを辨ずるなり。通教の八地以上の若きは、皆な此の位有り。但だ二諦に約して、以て功徳を歎じて品に優劣有り。

もし補處に約して稱歎すれば、自から下を攝することを得。別教の登地以上の若きは、即ち三諦を見て、三世の佛の智地に入る。行類は是れ同じ。但だ品の深淺に約し、十地の優劣無きにあらず。もし金剛補處^⑤を歎ずれば、即ち下地の諸の功徳を攝するなり。

圓教の明かす所の若きは、初發心に住して即ち三諦圓に顯われ、一切諸佛の功徳を具す。但だ四十位の深淺の品數は同じからずして、優劣無きにあらず。

もし金剛等覺に約して往歎すれば、即ち四十位の功徳、皆な攝するなり。但だ諸の菩薩、外に感ずる所に隨つて見聞同じからず。内に則ち本迹の高下測り難し。豈に定んで執するべけんや。今は但だ教に約して分別し、菩薩の功徳の法門を解釋するのみ。或る時は内に觀心に合して、行者をして諸の勝妙の功徳は皆な心より出ずると知らしめんと欲す。是れ則ち諸佛の解脱は、皆な衆生の心行に求むるなり。

- (1) 無等等 並ぶもののない、第一のものという意味で、仏を指す。
- (2) 隣果 隣極位という果。等覚位のこと。
- (3) 『法華』に行處と近處とを明かす 『法華經』安樂行品に身・口・意・誓願の四安樂行を説くうちの身安樂行に、行處(自身の処すべき行い)と親近處(対人関係の行いと範圍)を説く。「於後惡世。欲說是經。當安住四法。一者安住菩薩行處及親近處。能爲衆生演說是經。文殊師利。云何名菩薩摩訶薩行處。若菩薩摩訶薩。住忍辱地柔和善順而不卒暴心亦不驚。又復於法無所行。而觀諸法如實相。亦不行不分別。是名菩薩摩訶薩行處。云何名菩薩摩訶薩親近處。菩薩摩訶薩。不親近國王王子大臣官長。……常好坐禪。在於閑處修攝其心。文殊師利。是名初親近處復次菩薩摩訶薩觀一切法空。如實相。不顛倒不動不退不轉。如虛空無所有性。一切語言道斷。不生不出不起。無名無相實無所有。無量無邊無礙無障。但以因緣有。從顛倒生故。說常樂觀如是法相。是名菩薩摩訶薩第二親近處。(後略)」(『大正藏』卷九、37a14-b17)
- (4) 『華嚴』に明かす……の智慧 『六十華嚴』に「解脫月言。佛子。若菩薩行處力神通力如是者。佛行處力神通力復云何。答言。佛子。譬如有人見一塊土。而作是言。無邊世界地性爲多此耶。汝所問者。我謂如是。如來無量智慧。云何以菩薩智慧而欲測量。佛子。如人取四天下地性少分餘者極多。菩薩法雲地。於無量劫但可說耳。何況如來地。我今當說令汝知之。佛現爲證。如十方無量無邊世界微塵等諸佛世界。十地菩薩。皆滿其中。是諸菩薩有無量無邊業。修習菩薩功德智慧禪定。於如來功德智慧力百分不及一。百千萬億分不及一。乃至算數譬論所不能及。佛子。是菩薩隨如是智慧。順如來身口意。不捨諸菩薩三昧。勤心供養一切諸佛。於一一劫。以一切供具。供養無量無邊諸佛。能悉具受諸佛神力。」(『大正藏』卷九、574b3-19)とある。
- (5) 金剛補處 金剛は菩薩の十地の後心、補處は仏の座を補う成仏直前の位。二語を併せて、成仏直前の菩薩のこと。等覚位のこと。

(6) 四十位 円教の菩薩の階位で、十住、十行、十回向、十地の四十位をいう。これに等覺、妙覺を加えた四十二位を円教の階位とする。

Summary

An annotated Japanese-translation of Zhiyi's *Weimojing wenshu* 『維摩經文疏』 (6)

FUJII Kyoko

The *Weimojing wenshu* 『維摩經文疏』 is a Zhiyi's commentary on the text of Kumārajīva's translation of the *Vimalakīrti-nirdeśa-sūtra* (*Weimojie suoshuo jing* 維摩詰所說經).

Zhiyi 智顛 (538-597) composed the commentary with twenty-five fascicles in his latest years at the request of Prince Guang of Jin. After Zhiyi died, his disciple Guanding 灌頂 (561-632), the fourth patriarch of the Tiantai school, made up the commentary to twenty-eight fascicles. This Zhiyi's commentary seemed to have been one of the most important works to research his latest doctrinal thought by the reason that the work had been dictated by himself. In spite of that, the commentary had not been studied so often because of its great amount. Since Zhanran 湛然 (711-782) had distilled the Zhiyi's *Weimojing wenshu*, and made the *Weimo jing lue shou* 『維摩經略疏』 with 10 fascicles, his concise commentary was generally available for study on the *Weimojie suoshuo jing* in Tiantai school. In the above circumstances, at the present, although Zhanran's concise commentary is put in *Taishō shinshū daizōkyō* 『大正新脩大藏經』, Zhiyi's is not in spite of its value.

Recently some new studies on Zhiyi's commentary have been made in overall aspects, that is, from philological study to doctrinal thoughts one. Among them, Dr. Shunei Hirai's study is notable in pointing that not only in the Guanding's additional part of the Zhiyi's commentary but also in the Zhiyi's own dictation part, Guanding's additions from Jizang's 吉藏 (549-623) works, were to be discovered in the existing text. Scrutinizing the

citations from Jizang's works, these citations on Zhiyi's dictation part turned out to be trivial, in terms of his doctrinal thought. Therefore it can be safely said that Zhiyi's commentary is as valuable as it thought to be.

The author decided to make an annotated Japanese-translation of the *Weimojing wenshu*, which has not yet been made in Japan. The author used 『維摩經文疏』 (Sūtra Number 338, vol. 18 of *Shinsan Dainihon Zokuzōkyō* 新纂大日本統藏經 as original. It comprises 90 volumes, including 2 catalogues, which has been published from 1975 to 1980 by Kokusho Kankōkai 国書刊行会, mainly edited by Dr. Kosho Kawamura 河村孝照. And this newly edited Chinese Buddhist canon features great easy-of-use, which is succeeded from *Taishō shinshū daizōkyō* 大正新脩大藏經 in its form. And now one has access to Electric-text version of *Shinsan Dainihon Zokuzōkyō* via web site of CBETA (Taiwan-based Chinese Buddhist Electronic Text Association 中華電子佛典協會.)

This instalment contains merely a few paragraphs, i.e. from X.18.477c23 to X.18.480a13. I intend to continue publication of the annotated translation in the future issues.

*Professor,
International College
for Postgraduate Buddhist Studies*